

## 課題セリフ（2種）

### 課題1

女性「女役」から、男性「男役」からひとつ選んで読んでください。

#### 女役1

あたし、今朝目を覚まして、起きて顔を洗ったら、なんだか急に、この世の中のこととは何でも分かったような気になったの。どう生きなければならぬかが分かった気になったのね。ねえ、チェブトウイキンさん、あたし何もかも分かったのよ。人間は誰でも、骨身を惜しまず、額に汗して働かなくてはならないって。人が生きていく意味も目的も、その人の仕合わせも歎びも、そこにあるの。日の出とともに起きて、街路でコツコツ石を叩き割る労働者になるって、素晴らしいことだわ。牛追いか、子供たちに勉強を教える先生になるのもいいわ。鉄道の機関士だっていい。

（チェーホフ「三人姉妹」）

#### 女役2

何ともいいようがないわね、あの方には。だってあの方、私のいうことがまるで分らないし、私もあの方のいうことがまるつきり分らない。何しろあちらは、ラテン語は駄目、フランス語も駄目、イタリア語も駄目。いっぽう私のほうだって、お前も法廷で証言台に立ってくれるでしょう、英語なんてからしき駄目。そりゃあ、あの人、見かけは立派よ。でも口の利けないお人形が相手じゃあ、どうやって話ができるというの？ それに第一、あの服の取り合わせは、いったい何？ 上着は、きつとイタリアで買ったのね。でも、あのまあるく詰物をしたズボンはフランス製、帽子はドイツ、おまけにお行儀は全ヨーロッパのごちゃ混ぜ製よ。

（シェイクスピア「ベニスの商人」）

#### 女役3

お願いです、公爵様、私がどんな罪を犯したのかおっしゃってください。私に自分の言っていることが分かるなら、自分が何を望んでいるかを知っているなら、私が夢を見ているのでも気が狂ったのでもないなら、絶対そうではないと信じてますが、叔父様、私はまだ生まれてもない思いの中ですら、叔父様に背いたことは一度もありません。叔父様が公爵領をご自分のものになさったときも、父を追放なさった時も私は父の娘でした。謀反は相続するものではありません、いえ、たとえ身内から受け継ぐものとしても、私に何のかわりがあるでしょう？ 父は謀反人ではありません。ですから、叔父様、どうか誤解なさらないで、私の貧しさが裏切りを生んだなどとお思いにならないでください。

（シェイクスピア「お気に召すまま」）

男役1

そう、忘れ去られてしまうでしょうね。それが我々の運命で、どうにも致し方がない。現在私たちが深刻で、意味があつて、とても重要だと思つていることも、時が来れば、忘れ去られるか、さほど重要とも思われなくなるでしょう。おもしろいことに、将来何が高尚で重要だと見なされ、何が瑣末で滑稽と見なされるのかは、今の私たちには全く知りようがない。コペルニクスの発見だとか、あるいはコロンブスの発見なんものは、最初のうちは無用で滑稽なもののどころか、変人が書いた戯言で、とても真理とは思われなかった。これと同じで、私たちが当たり前に思つてゐる今の生活だつて、時間が経てば、何か妙な、居心地の悪い、おろかしい、けがらわしいものだと思われるかもしれない。

(チエーホフ「三人姉妹」)

男役2

アントニオ様。今まであなた、何度となくリアルトーの取引所で、手前のことを、頭ごなしに罵つてくださいましたな、手前の金の事、利子のこと。けども手前は、ただ黙つて肩をすくめ、耐えてきた。耐え忍ぶことこそ、われらユダヤ人の、まぎれもない印でございますからな。あなた、お言いなすつたね、手前のこと、邪教の徒だ、人殺しだ、犬畜生だと。そうして、この手前のユダヤ服に、唾、吐きかけた。それもこれも、手前がただ、自分の金を活かして、利子を取ったからというだけ。ところがだ、そのあなた様が、今度は、私めの助けがお入り用らしい。何てこつた。手前の所へお見えになつて、こうおっしゃる。「おい、シャイロック、金を貸せ」

(シェイクスピア「ベニスの商人」)

男役3

見たろう、恋人たちは決闘の場所を探しに行った。急げ、ロビン、夜の闇を垂れ込めさせるのだ。地獄の川、アケロンのように真つ黒な霧で星空を覆い隠せ。そして、いがみ合う恋がたきどもを道に迷わせ、二人が鉢合わせしないようにしろ。時にはライサンダーの声色を使い、悪口を浴びせてデイミートリアスを挑発しろ。また時にはデイミートリアスの口調でののしりまくれ。そうやってお互いを引き離すのだ。やがて死のような深い眠りが鉛のように重い脚とコウモリのような翼で二人の目蓋に忍び寄る。そうしたらこの薬草をライサンダーの目に絞りかけるのだ。

(シェイクスピア「夏の夜の夢」)

## 課題2

人物1と2の両方を、掛け合いをしながら読んでください。

男1（女1）がケーキの箱を持っている。男2（女2）が走って出てくる。

2 「それ、タラモソランのホールのイチゴケーキですよ」

1 「……そうですけど」

2 「譲ってもらえませんか？ そのケーキ」

1 「は？」

2 「今日息子の誕生日なんです。なのに予約するの忘れて……せめてショートケーキでもと思って店に行ったら、あなたがそれを買ってらっしゃるのを見かけて」

1 「え……追いかけて？」

2 「息子……あの、力（ちから）って言うんですけど、今年小学校二年で、タラモソランのイチゴケーキが本当に大好きで、今日も楽しみに待っているんです」

1 「……」

2 「四千円ですよ」

1 「……ええ」

2 「じゃ、五千元……いや、一万円で（お金を出し）お願いします」

1 「（差し出された一万円を見て）申し訳ないけど、このケーキは譲れません」

2 「どうして」

1 「これは、私にとっても大切なケーキなんです」

2 「あなたもお子さんの？」

1 「いえ」

2 「じゃ大人の方？」

1 「……まあ、ええ」

2 「大人の方なら事情を話せば……（土下座して）どうかお願いします」

1 「ちょっと、やめて下さい」

2 「うちは親一人、子一人で、息子にはいつも淋しい想いをさせて、だから誕生日はちゃんと祝ってやりたいんです」

1 「なのにケーキの予約を忘れたんですか？」

2 「それは……このところ仕事がたて込んで……」

1 「あなたの失敗を何で、私が償わなきゃいけないんですか」

2 「この人非人っ」

1 「は？」

2 「あんたみたいなヒトに、もらわれていくケーキが不憫だよ」

1 「（嘔き出す）不憫って……」

2 「大の大人が、七歳の子にケーキを譲ることも出来ないなんておかしい！」

1 「あなたが欲しいんだ」

2 「は？」

1 「あなたが『親をちゃんとやってる』って証明のためにこのケーキが必要なんです。……失礼します」

2 「ケーキ、よこせっ」

1 「ちよっとっ！」

二人はケーキを取り合い、ケーキは無残にも地面に叩きつけられ、二人は「あつ！」と声を上げる。やがて1がケーキを拾う。ぐちゃぐちゃである。

1 「もういりませんよね？　こうなっちゃったら」

2 「……」

1 「力くん、でしたっけ？」

2 「……ええ」

1 「大丈夫ですよ、許してくれますよ。さっきの一万円で、もっとすごいケーキ買ってあげればいいじゃないですか？」

2 「もっと、すごい、ですか……」

1 「いやそれよりも、あなたがこまでしてケーキを奪いたかった気持ち……彼のコトをこんなにも大切に想っている気持ち、まっすぐ伝えたらどうですか？」

2 「……え？」

1 「きつとそれが一番のプレゼントになると思います」

二人、ケーキを見る。

2 「すみません……ケーキ……」

1 「……いいんです、形はどうでも。どうせもう食べられないから」

2 「え？」

1 「亡くなった主人（妻）の誕生日なんです今日……彼（彼女）、タラモソランのイチゴケーキが大好きで……」

2 「……」

1 「……でも……生きている間に、私もまっすぐ伝えるべきでした」

1 は頭を下げ去る。2 は残され、なにやら考えると、携帯電話をかける。

2 「あ、力？　タラモソランのケーキ、買えなかった。ごめん……ごめん……でも、そのかわりに（よくよく考えて）……びっくりドンキー食べ放題！　え？　その方が嬉しい？　え、そうなの？　いやそれならそれで……何だ、そっか……」

2 は話しながら去って行く。